



社会実装を見据えた イノベーションを実現 ニューノーマル時代とSociety5.0

橋本 和仁

国立研究開発法人物質・材料研究機構理事長
内閣府 総合科学技術・イノベーション会議有識者議員

府省の枠を超え、科学技術イノベーションの実現を目指すために設立された「戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)」。
2018年からは2期がスタートし今年で3年目を迎えました。これまでSIPが果たしてきた役割や成果について、ガバナリングボード座長を務める橋本 和仁議員にお話を伺いました。

省庁が一体的に取り組むための司令塔

Q- 科学技術イノベーションを実現するためにSIPはどのような役割を果たしてきたとお考えでしょうか？

橋本議員- イノベーションには既存の技術やものを組み合わせるイノベーションと、最新のサイエンスやテクノロジーをもとに実現するイノベーションの2種類があると考えています。サイエンスや新しいテクノロジーは主にアカデミアで生まれますが、実際に製品やサービスの開発に取り入れて社会に還元していくのは企業。アカデミアを管轄するのは文部科学省であり、企業を管轄するのは主に経済産業省です。また、製品やサービスで分類したとき、農業や食品関連は農林水産省が、健康や医療に関わるものは厚生労働省が管轄します。

このように、政府組織は縦割りの仕組みとなっているため、横串を刺して省庁が一体的に取り組んでいくためには司令塔となる存在が必要なのです。これまでは各省庁が予算をもって展開していたものを、内閣府が予算をもって各専門分野のプレーヤー(研究開発者)に配分する、そのような体制を構築するためにSIPは設立されました。

SIPの研究テーマは単なる基礎技術ではなく、社会実装を前提に取り組んでいるものがほとんど。産業界からも高い評価を得ています。各SIP課題を通じて複数の省庁が連携する動きも出てきており、このような意味でもSIPは大きな役割を果たしつつあると考えています。

SIPが果たす社会的責任を再認識

Q- SIP2期の中間年となる3年目を迎えて、これまでのSIP2期全体の進捗や成果についての感想をお聞かせください。

橋本議員- 実は2期が開始された当初、予算の関係で1期の5年目と2期の1年目が重なってしまうという想定外の事態が起きました。本来であれば1期の締めくくりとして、さまざまな報告や

成果を取りまとめる業務がある年に、同時進行で2期の準備も始めることに。対象となる分野やテーマの選定はもちろん、PDの公募にも取り掛からなければならず、準備は多忙を極めました。しかし、2年目がスタートした頃から、プログラムはわれわれが期待していた通りに力強く動き出したと感じています。実際に成果も出てきています。たとえば「国家レジリエンス(防災・減災)の強化」。2020年7月に発生した九州での豪雨は、線状降水帯の発生を予測し、早期に避難判断に資する情報提供をすることで、被害を未然に防ぐことができたケースがありました。SIPにおける大きな成功事例であると同時に、われわれが果たす社会的責任やプロジェクトの重要性についても再認識した出来事でした。

ニューノーマルの時代に共通する Society5.0

Q- 新型コロナウイルスによって国難ともいえる厳しい状況が続いています。SIPは社会に対してどのように貢献していけるとお考えですか？

橋本議員- SIP課題は新型コロナウイルスの問題を見据えて検討されたものではありません。しかし結果として、Society5.0の目指す姿でもあるサイバーとフィジカルの融合は、まさにニューノーマルの時代と合致します。

コロナ禍においては、オンライン授業やリモート会議システム、オンライン診療システムなど、オンラインで代替するシステムが多数登場しています。また、スポーツ観戦や音楽ライブもオンライン配信で楽しむユーザーが増えています。もしかすると、ライブ配信が収入の柱になる日も遠くないかもしれません。

コロナ禍によって浮き彫りになったサイバーセキュリティの問題や物流の課題も含めて、ほとんどの内容がSIP課題のなかに含まれています。ニューノーマルの時代において、SIPの課題は間違いなく重要な役割を果たします。

まだまだ解決すべき課題は多いため、さらに進化させてニューノーマルの社会を実現できるように取り組んでいきたいですね。